御母衣白山神社

御母衣白山神社は、白山の神々を祀る白川村の 9 つの神社の一つである。白山は先史時代から現在に至るまで崇拝の対象となっている。まとまった形での白山信仰は、8 世紀に始まったと考えられている。当時、仏教の修行者たちが白山を修行の地として使用し始めたのだ。このような信者たちは登頂して、霊的な修養を自らの身に染み込ませるため、しばしば山中で長期間過ごしていた。白川地区には 2 つの山頂へ続く古道が知られており、そのうちの 1 つは山の神々を遠くから崇拝するために作られた御母衣白山神社の近くから始まっている。

御母衣白山神社のある氏神山は、正式な神社ができる前から信仰の場だったのかもしれない。社殿の横にある 2 つの大きな石板は、神を呼び寄せるための依代（よりしろ）と考えられていた可能性がある。この丘に生育する樹木や低木の中には、この地域では珍しいものもあり、その生態系は、人間の影響を受ける前の庄川流域の植生を示しているという見方がある。ブナ、トチノキ（Aesculus turbinata）、シャクナゲ、ユキツバキなどが代表的な植物である。